今日のイラスト 274「 イラストでたどる萩往還２　涙松の遺址」　　古谷眞之助

イラストでたどる萩往還 02　涙松の遺址

萩城跡　涙松の遺址　萩　佐々並　山口　山口　英雲荘（三田尻御茶屋）　防府

文・イラスト＝古谷眞之助

萩往還の出発点・唐樋札場から橋本川を渡って南に進んだ山間の曲がり角に「涙松の遺址」がある。ここは萩の街並みを眺望できる最後の地点。旅人は皆、往還松のそばで別れの涙を流したと伝えられている。

１８５９（安政６）年５月25日、安政の大獄に連座して江戸送りとなった吉田松陰は、唐丸駕籠から出されて別れの一首を残した。「かえらじと思ひさだめし旅なれば　一入（ひとしほ）ぬるる涙松かな」。その秋に伝馬町の獄舎で斬首される彼は、すでにこの時、死を覚悟していたのだろう。この日は雨模様だったという。五月雨の雨滴とも涙とも分からぬものが一筋、故郷・萩を振り返る松陰の頬を伝い落ちたに違いない。

萩市内で「吉田松陰」と呼び捨てにすると叱られる。必ず吉田松陰「先生」と呼ばねばならない。多くの幕末の志士たちの中でも、その指導者であった松陰は別格の扱いを受けている。明治期に大いに名を成した門下生も、所詮、単なる門下生に過ぎない。今に続く明倫小学校では毎朝児童が松陰の言葉を朗唱しているのはつとに有名な話である。「体は私なり。心は公なり。私を役して公に殉う者を大人と為し、公を役して私に殉う者を小人と為す」これは６年生向けのものだそうだが、その意味がお分かりだろうか。ともかく、それほどに萩では崇敬を集めている松陰。萩往還のガイド中は私も一応「松陰先生」と言っている。以前お客様の中に萩市出身の方がおられて、呼び捨てにして解説していたらお叱りを受けた経験があるからである。しかし、ここでは呼び捨てにさせてもらうことにしよう。その松陰が偉大な思想家であり、特に優れた教育者だったことに異論を挟む人はいないだろう。司馬遼太郎風に言えば、「萩と言う片田舎が生んだ松陰は、稀代の天才といっていい」ということになる。しかし。もちろんそれだけではないのが歴史の面白いところである。

今、或る理由があって長井雅樂のことを再度調べている。彼は、もともと共に航海遠略論では同じ見解を持っていた松陰が、最後には「青面の鬼」と罵倒する人物である。様々な資料を読むと、この二人のことを以下のように書いている。曰く、「雅楽と松陰の政見は、その初めに於いて甚だしき径庭（ 注・差異 ）ありしにはあらず。松陰は元来、鎖攘論者にあらず。常に航海遠略の策を主張し、之をもって同志に論告す。雅楽もまた当時に在りてその意見を同じうしたるは、後年の建言に視て知るべし」また、「長井は保守論者で持重家。松陰は改進論者で頗る急激家。長井は謹直の男で威儀を貴み、例格を順守して現状を維持する風があるが、松陰は門閥を打破して旧習一洗するというのが素志である」と。航海遠略策でもって一気に外様の萩藩を政治の表舞台へと導いた長井は、登場時期がほんの少し早過ぎて、正に時勢の犠牲となった人物である。尊王攘夷を標榜した藩是は彼の切腹後程なくして尊王討幕開国へと変節する。井上馨は維新後、その変節ぶりを咎められた際「あの頃はああでなけりゃならんかったのだ！」と答えたという。（ 2019.5.22　記 ）